

---

# 妖カフェ

鶲鳴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖力フェ

### 【Zコード】

Z3809Z

### 【作者名】

翳鴉

### 【あらすじ】

裏と表じゃ性格が全然違う少女、響。 だけどある日、学校の帰り。 とても素敵なカフェを見つけて…。

## 登場人物

麗亞  
れいあ  
響  
ひびき

高校1年生の女の子。

表明るくて優しくて元氣で誰にでも優しくてよく笑う。  
裏臆病で強がりで弱虫で泣き虫。  
他人と関わるのが本当は苦手。

両親とも、うまく行っていない。

天城  
あまき  
雲  
しもく

高校2年生の男の子。

明るくて優しくて元氣で鈍感。

妖の血を引く。

『華陽』というカフェで仕事をしている。  
響と一緒に学校で喋った事は一度も無い。

松田  
まつだ  
飛樹  
ひき

高校1年生の男の子。

無口で暗くて冷たくて本当は親切で優しい。  
妖の血を引く。

『華陽』というカフェで仕事をしている。  
響と一緒にクラスで一度も喋った事が無い。

皋月  
さつき  
露依  
れい

20歳くらいの男の子。

明るくて元気だけどチャラくて女つたらし。  
妖の血を引く。

『華陽』というカフェの店長。

女つたらしの達人？

鬼河  
おにかわ  
臨  
りん

高校1年生の男の子。

生意気でちょい冷たいけど照れ屋。

妖の血を引く。

小さい頃の記憶が無い。

『華陽』というカフェで仕事をしている。

## 1杯 始まりのカフエ

「麗亜！バイバイ！また明日ね！」二コッ

「うん！バイバイ」二コッ

麗亜  
れいあひびき  
響それが私の名前。

だけど皆、”麗亜”って言つ。

チャリンッ

「！？…。」

鈴の音が聞こえる。

「にやー。」

黒い猫が響を見ていた。

黒猫は走り出す。

「待つて！？。」

響は黒猫を追つた。

そして、ある一つの道に来た。

「静かな場所…甘い匂い？。」

チャリンッ

「あつ！待つて！」

とその時…

ドンッ！…！

「えつ！？」

「痛ッ！…！」

響の頭がドアとぶつかつた。

「大丈夫？君、ごめんね！」

「大丈夫です…。」二コッ

「お店に入つて、休む？」

「あつえつといたたたたた。」

「ごめんね、まあ、寄つて行つてよー」「ツ

「おお、かっこいいやつだ。

響はお店の男らしき人とお店に入る。

「まだ、開店前だけど。」ニコニ

「店長、どうかしたんですか？」

「…誰ですか、その人？。」

あ……扇を開ける際にふかれて 怪我させたやうで ちよこと お店で休まそつて。——「ツ

響は店にあるソファーに座る。

本當は「めんね 大丈夫?」

「わのびだー、俺はー」の  
華陽かよう

「月露依よりしへね」――ゴシ

「あつ、私は、麗里響と申しますー。」——「

は慌てて直紹介をする

「…………？」あつぎ二十九二十九…………」

「出たよ、露依さん。色気モード。」

「ほつとけば治るだね？」

卷之三

「何？何？俺をそんな顔で見つめない。露依は店の人には信頼されている。」

露依は店の人には信頼されている。

「私はもう帰ります。いろいろすみませんでした。」

響が帰らうとする。

「響ちゃん！」

「はい？なんですか？」

露依が響を引き止める。

可變...。

- 1 -

露依が響に抱きつく

店長！」

「「ねん、「」ねん。可愛すきでつに抱きつこうやつたあ～」」口笛「あつえい」と共鳴しあつた――・・・・・

響は慌てて店から出て行つた。

「あらう、おまえがうまいとおもふ」

「  
：悪い癖。

「 て 指さし た 理由 は ?

「当たつ前であります！」

そして、店長は生徒手帳

そして店頭に生徒用帽を出した。

「占いの？」

「響ちゃんのだよ、えつと皆、同じ高校だよね？響ちゃんも同じだ

から

「何でやる?」

「俺が別にいいんですけど……」

金

じゃあ連れてきてくれたら饗せん付きで焼肉でも行きますか

「アーチ」

「……………せめて」

「…何か、楽しそうなカフェだったなあ～」――コヅ

## 2杯 アルバイト決定？ 1

そして、気ままに次の日がやつてきた。

「じゃあ…行つて来ます。」

ガチャツ

響は家を出た。

そして、ポストの中身を見た。

「ん？…。」

赤い封筒が入つていた。

中身を見てみると。

『麗亜響様へ

昨日は何かとごめんね！－

今日もまたカフェに来てくれると嬉しいな！

『皇月露依より。』

「露依さんから？今日もカフェに…どうしよう？」  
響は手紙をかばんに入れて、気ままに歩いていた。

「麗亜！おはよー！－」

「おはよー！－」二コツ

響はいつもより、とても明るかった。

「あれ？生徒手帳がない！－」

「麗亜、それはまずくない？この私立学園は生徒手帳が無いと入れないよお～どうする？」

「どうしようつ…。」

響はかばんをあさる。

「はあ…ないよ。」

「なあなあ、麗亜響つて知つてる？』

「響一出て来いよ！！！」

「！？」

۱۰۰

「おお！ ナイス！ 飛樹！」

響の前には昨日、カフェに居た人達だつた。

「えつと。

一  
ほれ、  
生徒手帳  
「

六二

〔 二 〕

「別に、たいしたことではないからなーーー」

「臨、顔真つ赤。」

何!  
?

四三

響は生徒手帳を手に持つてかばんを持って、学園に入る。

俺等も入るか。

卷之三

- 1 -

ガシャンツ！！！！

ビクッ！

- 1 -

1

「どうかしたのか？」  
「」

いや……なんでもない！」——ハツ

あいつ、今物音だけしただけなのに、何であんなに怯えているんだ？

そして、放課後。

三人トリオは、学園の外で響を待っていた。

「つて、何で、飛樹も臨もクラス違うんだよーー！」

「知るか！俺に聞くな！！」

「…同じく。」

「それにしても、遅いな、響。あいつ。」

響は教室に居た。

自分の席で窓から空を見上げていた。

ガタツ

「……。」

響はかばんを持って、教室を出た。

そして、響が門を出ようとする。

パシッ！

「！？…。」

「「「見つけたぞ。」」

「えつ！？」

そして、三人トリオに強引に響がカフェに連れ去られる。

カラソツ

「店長ーーー！」

「なんですか一体！？」

響はパニックだった。

「響ちゃん。」

「露依さん！」

「響ちゃん、華陽わようで働かない？」

「えつ！？」

「そう言つ事か。」

「はじめられたぜ。」

「...回じぐ。」

「えつ...」

### 3杯 アルバイト決定? 2

「えつ……私がですか?無理ですよ……。」

「大丈夫だよ、皆教えてくれるし」 一ノッ

「……えつでも……。」

「やればいいだろ?」

「えつ?……。」

「やつていいとおもうよ、俺も教えるしー」 一ノッ

「……同じく。」

「!?……あつじやあ……よろしくお願ひします。」

「うん!よろしくね、響ちゃん」 一ノッ

響は”華陽”で働く事になつた。

「あつ、改めて、麗亜響です!よろしくお願ひします。」

「店長の、皐月露依。よろしくね」 一ノッ

「天城雲よろしくなー」 一ノッ

「まつだひき

「松田飛樹」。

「まつだひき

「鬼河臨よろしく頼む!」

「おにかわりん

「今日から、入れる?」

「一応……。」

響は不安だったが、楽しさといつ気持ちもあつた。

「だけど、店長、制服なくないか?」

「それがあるんだよねえ~」 一ノッ

「マジか!」

「お前の反応は面白いな、雲。」

「……まつたく笑つてないけど……。」

「はいはい、この二人トリオは置いてといて、着替えてきてくれるかな?」 一ノッ

「分かりました…。」

響は奥の部屋にあるカーテンで着替えた。

「……頑張りないと…。」

タツ

「お…お待たせしました。」

「…?…。」

「うわあ…。」

「なつ…。」

「…。」

「そんなに、見られると困るんですけど…。」

4人とも、顔を真っ赤にしていた。

飛樹はちょっと頬を赤めだつた。

「響ちゃん、可愛いね！よく似合つてるよ」――「

「なつ…。」

ボンッ…

響は顔を真っ赤にして、頭から湯気が出る。

「店長、いじめないでくださいよ。」

「露依さんの癖。」

「…マジない。」

「じゃあ、接客とかできるかな？」

「…一応出来ると思います！…」

「そつか、じつちもいろいろサポートするから、大丈夫だよ」――「

「あ…ありがとうございます…。」

「ドキッ！

何でこんなに可愛いんだ！

「…響ちゃん…。」

「はい？」

「…敬語じゃなくていいし、君付けとかいらない。」

「あつうん、じゃあ飛樹って呼べばいいよね」――口芝

「…うん。」

「じゃあ、私も響でいいよ」――口芝

「…分かった。」

「じゃあ、店開けるよお～」

そして、店は開いた。

「いらっしゃいませ」――口芝

だけど、ここのかつは女性が多い。  
まして常連さんは皆店員田端で来てる感じ。  
そして、響は嫌な田で見られている。

「何? あの子、バイクの子?」

「え? も、あの子も店員田端になんかしょい?」

「……。」

女性の客が響の田の前で口を詰める。  
ガタッ

「ねえ、あんたさ、じつはこの店員田端に入っちゃったんでしょい?」

「……? やあ――」

響が耳を塞いで田をつぶる。

「何びびった不利してんだよ――」

客が響の手をつかむ。

「……。」

パシッ！

「…？」「

「…」の人、店長の友人の娘なの、だからあんまり手を出さないで。

「…？」飛樹…。」

飛樹が響を助けた。

「…飛樹君がそう言うなら本当なんだろうね、悪かったわ。」

「…あついえ…。」

「…大丈夫？」

「えつ！？…あつはい！」ニコツ

「…そつか…。」

そして、初日のバイトは終わった。

「でわ、お疲れ様でした」ニコツ

響はバイトが終わり挨拶をして帰った。

「…響、僕が客から助けたとき体が震えてた。」

「…そつか…。」

「それなら、前学校で音がしただけなのに、驚いてたな。」

「おかしいなつて、敏感なのか？」

「まあ、どうだらうね…。」

ガチャツ

「…ただいま…。」

「帰つてくるのが遅い…！…！」

「…？」ごめんなさい…。「めんなさい…。」

バシツ！バシツ！ドンツ！

私に幸せなんて来るの?..。

「お前はこいつもこいつも……」

「バシッ！パンシ……！」

「『めんなさい…お父さん』『めんなさい…』」

「「つむせ」……」

「パリッシュ……」

「お前は俺の『う事だけを聞いていればいいんだ……』

ガチャッ

「……痛……。」

響は肩から血が出ていた。

さつき父親がガラスを肩に刺したのだった。

ポタンッ

「……我慢すればいい……」のままでいい……。」

響は泣きながら自分の手当てをしていた。

私が我慢すれば、家族の中はちゃんと行く…大丈夫。

「う……『めんなさい……。』

「麗亜？その傷どうかしたの？」

「ああ……ちょっと、」けちやつてそのままわれりやつて、「一コラシ

「麗亜はデジだねー今度からは『笑』をつけないといけないこよ。」

「うふー。」一コラシ

響は自分の包帯を巻いている肩を見た。



ガラッ

「じゃあ、既に今日も頑張つてね」――口

カラソッ

「こりひしゃいませー」――口

大丈夫、後で電話すれば。

「響ちゃん、休憩10分ね、お腹すいてない？」

「えつ……少々……」

「じゃあ、雲、後は三人でやつとくから、休憩入つて。」――口

「了解つす。響。」

響と雲は奥の部屋で休憩を取る。

「ケーキと紅茶でいいか？」

「あつうんー」――口

「了解。

響は自分の携帯を見た。

「!??。」

着信がすべて、父親だった。

そして、電話が鳴った。

「!??あつはいもしもし?」

響は出た。

「響か?今どこに居るんだ?」

「あつ……お父さん?今……ちょっと。」

「どうかしたのか?」

「私ね、バイト始めたんだ、お父さん?」言ひの忘れた?「めんなさい。

「そりか、バイトを始めたか、なり毎日帰つてくるのが遅くなるな。

「うん、『めんなさい。』

「うん、『めんなさい。』

電話をしているときに靈がケーキと紅茶を持ってきた。

「お父さん、今日ケーキ持つて帰つて来るね」二口ツ

「あつ、じゃあ楽しみに待つてるよ」二口ツ

「うん、バイバイ。」

そして、電話は切れた。

「親からか?」

「はい!」二口ツ

「そりが、早く食べようぜ。」二口ツ

「はい!」二口ツ

なんだ、虐待じゃなかつたなら…良かつた。

「…おいしいですー」二口ツ

私は”幸せ”ではないと自分自身で思つ…。

ガチャッ

「お父さん、ただいま」二口ツ

「おかえり、響！」

バシッ！

「！？」

グイッ！

帰つてきて早々、頬を殴られる。  
手を引っ張られる。

「お前はもう、要らない！死ね！」

「！？」

そして、父親は風呂場に来る。

そして、響の頭を持つて、つつじむ。

「！？グツ！？」

響は溺れていた。

バシャッ！

「…ゲホッ！…ゲホッ！…う！」

「死ね！お前なんか死ねば良い！俺の許可なくバイトをするな…！」

「ゲホッ…ごめん…なさい…ゲホッ！…グツ！」

「口答えをするな！」

「…ハア…ハア…ゲホッ」

響は風呂場で倒れていた。

服はビショビショ、体や顔に傷や血が出ていた。

「…う…」

「…う…」

響は涙を流した。

怖い！…痛い！…苦しい！…違つ！…。

何を怖がるの？

分からない。

父親が怖いの？

違う！

痛い？父親に暴力を振られて？

違う！

苦しい？父親が狂つてしまつて？

違う！…違う！…やめて！…

父親も狂つてゐるけど、あんたも狂つてしまつてゐる。  
！？…。

ハツ！！

「！？…ゲホツ！…ゲホツ！…。」

響はビショビショのまま、部屋に行く。

そして、服を着替える。

「……。」

そして、傷を手当てをする。

「お父さん、どこのに行つたんだろ？」「…

響が風呂場に居る間、父親は居なくなつていた。

「…お父さん…。

そして、響の携帯が鳴る。

「ん？…はい？」

「あつ、響ちゃん？今大丈夫？」

「あつ、店長！…はい、大丈夫です！」

「今、響ちゃんの家の下にいるんだけど？」

「えつ？家の下ですか？？」

響は部屋の窓から外ののぞくと、露依が響に手を振る。

「今から会える？」

「あつ……」めんなさい。今日まだよつと……。」

だけど、既で出かけようつって話になつてね。

「！？」

行きたい……だナビ。

行きたい……だナビ。

「響ちゃん？？」

「あつ……えつと……。」

「ん？」

「行きます！？」

「そつか、じやあすぐ下来る？」

「はー！」二コヅ

響は準備をした、そして家の鍵を閉めて、店長達と出かけた。

「響……俺の響……だあああああ……！」

父親が帰ってきて、家を散らかし暴れていた。

「お前は一生俺の物だ。」

”「めんなさい。」…私はあなたと喧嘩事がとても怖くなりました。

だから、私は…”妖怪”と暮らす事にします。

サヨナラ…。

「響ちゃん、盛り上がりてる?..?」

「はい!…」ニコッ

カフェの階でカラオケにきていた。

店長はもつつかり、テンションあげあげ。

「……。」

響は携帯を見る。

着信なし、受信もなし…かあ…。まだ帰つてないのかな?

「響、お前歌わないので?」

「えつ? 雪君が歌つていいよ」ニコシ

「俺はいいの、お前歌えよ。」

「…歌えるかな?」

「大丈夫だよ。」

響はマイクを渡され、ステージに立つ。

「…見つめてる、君の顔を。恋しきやつた私だもん。」

ドキッ!…!

男子全員、頬を赤く染める。

歌うますぎじやんか。」

「同じく」

「べ。別に俺はうまいとか思つてないしなーーー。」

卷之三

「すみません。」

響は部屋から出で

モジモジ

「父が死んで

「早く帰つて来い！！！お前は俺なしじゃ生きていけない！帰つてきたら罰だ！」ブチツ！

カタツ

響は携帯を落とした

カラシツ

「響ちゃん？」

布小！殺される！布小！！！

「響？」

響の体は震えていた。

「あつ…私、もう帰ります！。ありがとうございました。」

バシッ！

！？  
飛樹、  
離して  
私帰る。

怖いなら帰らなくていい。

「…？」

「…そんなに体を震わせて怖いんだろう？」

「…？…怖くなんか…ないもん。」

「…。」

「私は…強いもん…。」

怖い！

「…そんな、泣きそうな顔でよくそんな言葉がいえたな。」

「？！」

「助けてほしいなら言えよ！響…」

「！？…。」

「お前がどうしてもつて言つなら、助けてやるよ…。」

「…？…う…。」

「響ちゃんは一人じゃないよ」二口

「う…う…怖い…一人じゃ不安で…だけど…そんな事を思つてるととても辛い…。」

響は泣きながら自分の本音を話す。

「助けてほし…う…助けて…う私は死にたくない…。」グズ

「…僕が守るよ。」

飛樹は優しく響を抱きしめた。

「！？…。」

「行きますか？」

「そうだな！」

「…久々。」

「皆、なまつてないよね？」

「あつたり前！」

「？…。」

ガチャツ

「…ただいま。」

「響！…！…！…！」

「…？…。」

「来い！」

「？！…。」

バシツ！ドンツ！ガシャンツ！バチーンツ！ダンツ…！

「…「めんなさい！…！」

「許されると思つてゐるのか…！」

「本当にお前は…！…！」

父親がとても暑いお湯を持つ。

「…？…嫌…嫌…嫌…！」

バシャンツ…！

「？！…。」

「…父親が娘を虐待か。」

「…？…なんだお前ら…！…！」

「…なんだお前ら…！」

「…僕は、妖狐の飛樹。まあ、妖怪。」

「…なんだ…！」

「…はあ…人間だからってあきれるな。」

「…？…。」

父親は透明な檻に閉じ込められる。

「クソツ！出せ…！」

「…響は僕達が貰う。」

「…？…駄目だ…！」

「お父さん…。」

「…じやあなぜ、傷つける…」こんな姿を見ても何も思わないのか…！

「…」

「…俺だつてな…」こんな事…したくないんだ。」

「お父さん……」めんなさい。私は、お父さんの理想の娘になれません。

私はあなたと居る事がとても怖くなりました。  
だから、妖怪と暮らします……サヨナラ。」

飛樹が響を抱ぐ。

「……響……」

「……」めんなさい……」

響の瞳には、涙が溢れていた。

「飛樹、これからよろしくねー。」一ノ瀬

「……お前のままでいいと思つ。」

「……そつか……ありがと。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3809z/>

---

妖カフェ

2011年12月16日21時52分発行